

V 試行事業及び報告会

5-1 試行事業実施団体一覧

	実施団体名	団体概要
1	つきさむくらしネットワークの会	人とのつながりや生きがいを持って生きることの大切さを考え平成18年スタート。あらゆることを題材にしたチャレンジ型のサロン。健康づくりサロン、ものづくりサロンなどを開催。
2	NPO法人活き粋あさむし	安心して、ずっと住み続けることができる地域を作る、地域づくり活動を行っている。地域課題を解決することをミッションとして、蜚の再生、子育て支援、高齢者の健康支援、雇用創出、農地の活用を重点事業として活動を展開している。平成15年3月NPO法人として認証。
3	NPO法人神田雑学大学	人間誰しも経験という情報を持っている。その経験を話す人が講師となり、興味を持つ人が集まって聴く。毎週金曜日、18～20時まで開講、場所はちよだボランティアセンター。講師謝礼、授業料、場所代が無料の三タダ制。講座抄録をホームページに載せ、情報発信をしている。平成13年4月、NPO法人認証。
4	NPO法人エンツリー	メンバーの幅広いスキル、キャリアを生かして各種講座の企画・運営、冊子の作成、地域ネットワークづくりなど、地域のコンシェルジェを目指し活動。平成20年11月NPO法人設立。
5	NPO法人静岡県生きがいづくり協会	生きがいづくりの支援を通して「新たな公共づくり」を目的とし、福祉・生きがいづくり、生きる力の養育、地域づくり、余暇活動の推進、エコロジー社会の促進を柱に活動。平成5年6月NPO法人設立。
6	滋賀県健康生きがいづくり協議会	滋賀県在住の健康生きがいづくりアドバイザーで構成される任意団体。主な取り組みは、びわ湖ふれあいウォーク、おしゃべりボランティア、在宅介護の支援活動、びわ湖水質保全のための植樹活動。平成8年3月設立。
7	和歌山県健康生きがいづくりアドバイザー協議会	和歌山県在住の健康生きがいづくりアドバイザーで構成される任意団体。主な取り組みは、ライフマイスターのグループ活動、地域の社会福祉協議会の中高齢者セミナーでの講師活動の他、県立図書館ふれあいルームで定期的に健康と生きがいについての講座を開催している。平成11年11月設立。
8	岡山県健康生きがいづくりアドバイザー協議会	岡山県在住の健康生きがいづくりアドバイザーで構成される任意団体。主な取り組みは、子育てお母さんの応援などの生きがい創造応援講座、健生出前講座での講師派遣、ニュースポーツの普及サポート。平成12年4月設立。
9	社団法人コミュニティネットワーク協会	コミュニティづくり事業の開発推進及び人材養成等を行っている。主な事業は、住民自治に基づくコミュニティづくりを具体的に探求するための調査研究。コミュニティづくりを推進するための運営組織のネットワーク化。多世代・共生のコミュニティ創生、コミュニティの交流の場、拠点づくりの支援。コミュニティ事業の指導者、組織者、協力者などの人材育成。平成11年設立。
10	NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会	平成8年グリーンツーリズム研究会設立。その後、実験的農村民泊を実施。農村民泊を中心に農村文化の活動を行い、内外に情報発信をしてきた。農泊認可取得家庭数は50軒。研究会の会員数は約370名。平成16年NPO法人として許可。

5-2 試行事業の実施報告

「月寒わが家の手わざ市」

つきさむくらしネットワークの会

1. 事業の目的

地域・家庭の、そして生活の工夫や趣味の成果物の展示・即売会を契機として

- ・地域住民(家庭や地域)の手わざを掘り起こし、(社会参加、生きがい就労の場として)起業のシーズを発見する。
- ・地域住民の交流を図り、生活の活性化と地域ケアのインフォーマルネットワークを形成する。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

<実施体制>：企画委員会設立：14名(内つきくら9名、協力者5名)、顧問1名

企画会議開催回数：実施前(9回)、振り返り(1回)

<主催>：つきさむくらしネットワークの会

<後援>：月寒地区連合町内会、みはる幼稚園、月寒児童会館、ちあふる・とよひら

介護予防支援センター月寒、健康生きがいづくりアドバイザー北海道協議会

札幌市社会福祉協議会、豊平区社会福祉協議会、月寒公民館運営委員会

豊平区第一地域包括支援センター、豊平区第二地域包括支援センター

月寒まちづくり協議会、健康・生きがい開発財団

<協力>：株式会社エイド、月寒郷土資料館、ボーイスカウト札幌地区第24団

さっぽろ孤立死ゼロ推進センター、道草マーケット、豊平区第二地域包括支援センター、

札幌消費者協会、介護予防支援センター月寒、北のつくり人、札幌市消費者センター

<広報活動>

① 地方・地域新聞への広告掲載

北海道新聞(1/12夕刊・1/13朝刊)、道新『札歩路』(1/7)、「つきさっふ新聞」(1/1号)、道新
 広告欄『あれこれっと』(1/12)、市民サポートネット「ジャーナル」

② 月寒町内会全域への回覧板・80町内会 計1100枚(班数)

③ ポスターの掲載、パンフレットの設置 (11/13～随時)

地下鉄通路広報板、区民センター、公民館、図書館、地域商店・居酒屋、協力者宅

④ テレビ (HBC = 当日一日取材)、ラジオ局 2 社 (FMアップル、ノースウエーブ) へ依頼

3. 実施した事業の概要

1) 実施日

平成22年1月16日 (土曜日) 11:00～16:00

2) 実施場所

月寒公民館: 札幌市豊平区月寒中央通7丁目

使用室: 体育室 (1F)、大研修室 (1F)、料理室 (2F)、地域交流室 (1F)

3) 事業の対象

<取扱内容> 地域住民による手づくり品 (手工芸品、食品)、生活の工夫や特技

地域資源 (介護・子育て・健康に関する行政・団体) 紹介

<対象者> 月寒地区及び周辺地域の住民、月寒に所縁のある方も含む

<出店者数> 57店 (喫茶・つきくら店、相談、ボーイスカウトコーナー含む)

<その他取り組み>

・展示: 郷土の歴史写真、つきくら21年度活動状況 (つきくら便りと活動写真)

・相談4コーナー (介護・健康・子育て・消費者センター) 設置 ・託児室設置

・アトラクション (音楽グループあみゆぜ。演奏、民俗芸能鬼剣舞・太鼓演奏、月寒児童館児童の
琴演奏・ハンドベル・合唱・大画面紙芝居、ピアノ・エレクトーン・尺八による
ジャズコンサート、ボーイスカウトの手旗信号等)

・出店者、主催者各サイドへのアンケート調査

4) 事業の内容

<タイムスケジュール>

○企画会議開催日時: 10/17 (土)、10/24 (土)、11/2 (月)、11/6 (金)、11/16 (月)

12/15 (火)、12/22 (火)、1/13 (水)、1/15 (土)、1/24 (日)

各18時～

○出店者募集: 10/17～11/6

○ポスター・チラシ作成、配布開始: 11/13

○出店者へ出店概要発送 11/8

- 出店者最終確認 1/8 (57店確定)
- 会場との折衝・打合せ等 10回〔会場準備責任者：澁谷豊志〕
- (前日)準備:会場設営、出店者荷物搬入(前日可能者)、アトラクション出演者下見
 - 第1会場設営(18:30～20:30) テーブル・パネル・椅子・コード・スリッパ設置看板・横断幕貼り、照明・音響設備確認
 - 第2会場設営、託児室準備(20:30～21:30) テーブル・パネル・遊具設置
 - *要員41名(学生バイト7名、つきくら・企画21名、地域住民等ボランティア13名)
- (当日)準備:会場設営最終点検(8:00～8:30)、出店・来場者対応、交通整理
- ＜当日のスケジュール&各会場の内容＞
- (8:30～10:00) 出店者受付、出店準備、喫茶室準備、展示・掲示、昼食準備開始(料理室)
- (10:45～10:55) 開始前の連絡事項:主催代表
- (11:00～) 開場 来場者用受付、来場者数カウント
 - 第1、2会場にて、展示即売、実演、アトラクション、相談コーナー、託児の実施
- (～16:00) 閉会 出店者用アンケート回収
- (16:00～16:40) 出店者撤収、使用機材・用具等 片付け・返却 終了
- ★第1会場(体育室):46店の主な出店内容
 - 〔アロマ・リンパマッサージ・美容アドバイス・紙粘土フラワー・木工品・陶芸・ほかしビーズ製品・布ぞうり・涙目人形・押し花・和紙あかり・藍染・布と石のアクセサリ―古布あーと・手作りみそ・革細工製品・エコ石鹸・パッチワーク製品・カリグラフィ―ジオラマ・顔料と絵・ミニカード・アートフラワー・アレンジメント実演・フェルト作品・編み物・子供用オリジナルドレス・ガラス細工小物・織物・木製まな板・積み木・帽子・雛人形・発明品「ころころくるん」(キャリーバック用そり)・日本茶の入れ方・孫の手マッサージ店・子供の遊びコーナー(ボーイスカウト担当)等〕



★舞台側でアトラクション実施〔11:30～(各30分)、1時間毎4部実施〕

＜アトラクションのプログラム＞

第1部、11:30～30分 ピアノ・フルート・オーボエ演奏

出演:音楽グループあみゆぜ。(3名)

第2部、12:30～30分 民俗芸能鬼剣舞&太鼓演奏

出演:札幌鬼剣舞同好会 (9名)

第3部、13:30～30分 月寒児童館 琴演奏・ハンドベル・合唱

出演:(児童15名)

大画面紙芝居「山姥」出演:語り、琴・尺八伴奏 等 (指導者9名)

第4部、14:30～30分 ピアノ・エレクトーン・尺八によるジャズコンサート

ピアノ・エレクトーン演奏(1名)、尺八演奏(1名)

上記各準備時間等に、ボーイスカウトの手旗信号等実演

(ボーイスカウト札幌地区第24団 12名)

★第2会場(大研修室):構成内容

出店3〔パン、和・洋菓子、お菓子アクセサリー〕

喫茶コーナー(つきくら):コーヒー、甘酒、パン・おにぎり販売

相談4コーナー:(①介護相談:豊平区第1・2包括支援センター、②健康相談:つきくら、

③子育て相談:エイド、④消費者トラブル相談:札幌市消費者センター)

★託児室(地域交流室):豊平区 子育て支援センターの貸出おもちゃ使用

(ポールテント、積み木、カルタ、紙芝居、ガラガラ等)

★料理室:販売用おにぎり作り、運営委員用昼食(味噌汁、おにぎり)準備、及び控え室

<活動の一場面>



▲民俗芸能に見入る観客



▲和紙絵・雛人形を受け取り、にっこり



▲テレビ局も取材に (HBC)

4. 事後評価

吹雪の中、620名の来場者があった。時間的推移は、開場後30分間に220名、その後、平均して50名前後が来場。13:00、15:00に小さいピークが見られた。全般的に、来場者の大半が中高年女性。午後からは、アトラクションに合わせてか、児童や子育て世代の来場者も多く見られた。

出展者からは、「出店して良かった」、及び「次回も出店したい」で「思う」が約8割を占め、その他項目も総じて好印象であったが、「準備が大変だった」と思う38%、思わない33%、どちらでもない24%と、「季節が良かった」と思う38%、思わない29%、どちらでもない24%のように評価が分かれている。評価の分散には、出店経験の差や、当日の悪天候、年齢層などの要因が影響と推測される。

来場者からは 会場の出入り口・会場内等で、来場者に直接質問し感想を伺った。「いろいろな作品があり、大変楽しかった。」「作品の素晴らしさやレベルの高さに驚いた。」「もっとゆっくり見たかった。」「今度はいつですか。」「私も出店してみたい。」など、好評を得た。

全体の評価としては、悪天候にも係らず多くの来場者があり、出店・来場者共に楽しく、満足度の高い催しとなった。アトラクションへの出演、応援等で若い世代も多く訪れた。喫茶コーナーも友人、家族の語らい・くつろぎの場として賑わい、異世代交流の場ともなった。心がこめられた手わざ、ぬくもりある作品を媒体とした交流で、感動・元気を交換することが出来た。口コミで集まった主婦ネットワークの力の結集の成果と考える。

5. 今後の課題と展望

<課題>

超高齢化社会に生きる私達には、真の健康長寿実現への努力が求められている。貧困と孤立がすでに社会問題となっているが、社会の老化に少しでも歯止めをかけていくためには、自立と連体(ネットワーク)が必要。楽しみを持って生き、助け合い、少しだけでも社会参加や収入の道を閉ざさない、学びあうことなど、出来ることから行動を起す必要がある。そうしたきっかけ作りに、地域や家庭に埋もれる資源「手わざ」を掘り起こし、照会、活用を図ることは、個人や地域に新たな活力を生み出していくと考える。しかし、大きなイベントは、会場探しや費用の捻出が大変である。今後の開催には、会場確保の工夫と資金づくり、組織化(新たな出店者の掘り起こしとネットの充実)等、地道な努力が必要である。出店者アンケート「準備の大変さ」のばらつきなどは、出店経験の有無が一つの要因と考えられ、事前のプロデュースも必要。また、天候についても、より良い季節や日時の選択も考慮が望まれている。地域の活力を高めるひとつの方法として活動を継続していきたい。

<展望>

継続して場を作ることが出来れば、様々な形の起業の道が開けていくと考える。出店者、来場者双方から今後の開催を望む声が多く、今回は11月開催に向けて、4月から企画の再スタートを予定している。顧問の長谷川先生からは、「趣味の産物や手わざで起業するためには、何よりも、自分の好きなことを生きがいをもって続けることが大切。日々人つながりを生かし、育てていく。持てる物をコストを賭けずに、少しずつ出していくなど、小さめにして頻度を高くしていくことでチャンスを作っていくことが望ましい。会場探しは、小規模で無理なく定例開催か、2年に1度としたり、既存の催し(夏・秋祭り、地域イベント、運動会等)に便乗する事もひとつの方法」と、アドバイスをいただいております。今後は、出店者間の交流の場作りや出店法(ディスプレイ・コスト計算等)の勉強会も企画し、小さなビジネス化に向けて共に学んで行きたいと考えている。

来場者が新たな作者や出店者となり、ネットワークが深まれば、さりげない地域見守りにも寄与することになる。 “生きがい就労が一番の介護予防”を柱として、実践して行きたいと考える。

団塊世代が活躍する食農、 地域文化の体験観光のプログラム

——— 特定非営利活動法人 生き粋あさむし

1. 事業の目的

現在、当法人は、コミュニティレストラン、及び農業におけるコミュニティビジネスを展開している。この食と農の活動を基盤にして、昨年度より食と農の体験教室を本格実施している。現在は、20歳代から40歳代の若い世代が中心になって行っている事業であるが、団塊世代以上の世代が体験観光のインストラクターとなるようなプログラムを開発して、現行の事業の強化を図っていきたいと考えている。

来年末には青森駅まで新幹線が開通することから、青森らしい体験観光のプログラム作りが各地で行われているが、当法人が活動している浅虫温泉にも、当地ならではのプログラムの創出が求められている。

現在、浅虫温泉では、高齢者のボランティア活動によって、早朝散歩や里山トレッキングが行われているが、無償のボランティアの活動ではなく、体験観光のプログラムを提供することで、収益を生むコミュニティ・ビジネスを創出したいと考えている。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

<現在までに構築された連携>

行政 青森市農業政策課→プログラム広報

青森県 農林水産部 構造政策課→活動PR

青森県 東青県民局→情報提供を受ける、体験指導者研修へ参加予定

青森市教育委員会（予定）→食育体験のフィールド提供

民間 浅虫町内会→地域への周知

財) むつ小川原地域・産業振興財団→体験教室への助成

株式会社ティー・ゲート→プログラムの販売支援

<今後構築を予定している連携>

民間企業との連携

食と農の体験教室を民間企業の福利厚生として活用してもらえるように、連携していきたいと

考えている。特に土に触れる作業は、デスクワークのワーキングパーソンにとっては、メンタルヘルスの面で有効な作業であることが近年注目されている。

団塊世代のスタッフには、ピアカウンセラーとして身近な相談者としての役割を持つことができ、経験を生かせるのではないかと考えている。

3. 実施した事業の概要

●郷土料理調査のための打ち合わせ会議

- 1) 実施日：平成 21 年 12 月 13 日（日） 9：00～12：00
- 2) 実施場所：活き粋あさむし事務所
- 3) 事業の対象：当法人グリーンツーリズムインストラクター 2 名、自然体験指導者 3 名
- 4) 事業の内容

地元の高齢者に聞き取りをして青森ならではの郷土料理を選んでいるが、体験観光として必要な時間やストーリー性を考慮してコンセプトを固める打ち合わせ会議を実施した。

今後の作業と日程を決定して、関係者と調整をした。

●郷土料理の聞き取り

- 1) 実施日：平成 22 年 1 月 10 日（日） 9：00～13：00
- 2) 実施場所：活き粋あさむし事務所
- 3) 事業の対象：当法人グリーンツーリズムインストラクター 1 名、自然体験指導者 1 名
郷土料理指導者 1 名



4) 事業の内容

本事業でモデル的に行う体験観光プログラムのテーマは「しとぎ餅」に決めた。

この他にもレシピは作成するが、「しとぎ餅」にポイントを絞った。聞き取りでは、郷土料理指導者からいつもの通りに調理してもらい、分量や時間はインストラクターが測定した。後日分量の確認とレシピについてインストラクターが郷土料理指導者に再度指導を受けた。

●体験観光行動マニュアル作成検討会

- 1) 実施日：平成 22 年 1 月 11 (月) 13:00 ~ 17:00
- 2) 実施場所：活き粋あさむし事務所
- 3) 事業の対象：当法人グリーンツーリズムインストラクター 2 名、自然体験指導者 2 名
- 4) 事業の内容

マニュアル作成のために、それぞれの指導者が現在使用している指導案や資料などをもとにして検討を行った。

●郷土料理レシピ作成・体験観光行動マニュアル作成

- 1) 実施日：平成 22 年 1 月 10 日～1 月 29 日
- 2) 実施場所：活き粋あさむし事務所
- 3) 事業の対象：グリーンツーリズムインストラクター 2 名、自然体験指導者 2 名
事務職員 1 名

4) 事業の内容

郷土料理の聞き取りをもとにして、レシピの作成、行動マニュアル等体験観光に必要な資料を作成した。



- ・体験観光を実施するために必要な業務一覧
- ・体験観光行動マニュアル
- ・レシピ等配布資料
- ・募集パンフレット

- ・体験観光の当日チェック項目
- ・紙媒体（紙芝居）



●体験観光インストラクター研修・評価会

- 1) 実施日：平成 21 年 2 月 14 日 13:00 ~ 17:00
- 2) 実施場所：活き粋あさむし事務所
- 3) 事業の対象：当法人グリーンツーリズムインストラクター 2 名、自然体験指導者 2 名
 団塊世代の会員 4 名
 協力NPO団体 2 名
- 4) 事業の内容

前日 2 月 13 日は指導者と団塊世代の会員で調理担当が準備を行った。体験観光行動マニュアルにそって、「しとぎ餅」のプログラムを実施してもらった。事前に必要な準備や当日の準備など実際に進行する場合に課題になる点をまとめた。

団塊世代がインストラクター役を实践した研修会の終了後に、成果と今後への課題について話し合いを行った。



4. 事後評価

① 体験観光を実施するために必要な事前準備しておく資料

- 1) 体験観光を実施するために必要な業務一覧
- 2) 体験観光行動マニュアル
- 3) レシピ等配布資料
- 4) 募集パンフレット

平成22年度

食と農の体験プログラム

青森の物語を畑から真っすぐに



特定非営利活動法人 活き絆あさむし

5) ホームページ募集画面作成

6) 体験観光の当日チェック項目

ボランティアではなく、参加費を徴収し体験観光プログラムのサービスを提供するためには、田舎の素朴な雰囲気を大事にしながらも、安心して体験していただけるように事前の準備が必要不可

欠である。臨機応変に指導できるようになるためには事前の練習やリハーサルに時間をかけることが必要になる。

事前に必要な資料類のフォーマットを作成し、新しいプログラムを作成する時に、様式に従って考えていけば必要な準備ができるようにした。

②体験観光を実施するために必要な人材

体験観光でお客様をお迎えするために必要な業務の種類をまとめたところ、体験指導者だけでなく、体験プログラムを販売するために販売担当者が必要であり、事務局機能も充実させていく必要があることがわかった。

団塊世代に体験観光事業で活躍してもらうためには、どの部分を誰が担当するのかを事前に考えていく必要がある。今回の事業では今後体験観光で活躍していただけたような団塊世代のNPO会員とグループワークをした結果、体験指導者として郷土料理の作り方や文化の話をすることはできるが、企画・運営に関しては適任者がいなかった。私たちがフィールドにしている青森市浅虫地区では高齢化が進み、団塊世代のモデルとなる対象者が少ないために、具体的に業務分担をイメージすることはできなかったが、次のような人材を獲得できれば体験観光事業を本格的に実施することができると思った。

- 1)料理名人で郷土料理を作ることができる人
- 2)体験プログラムを作り資料を作ることができる人
- 3)体験観光のメニューを販売するためにパソコンができる人
- 4)体験の様子を撮影するためにカメラが得意な人
- 5)事業全体を理解できる事務局職員

団塊世代はパソコンも得意な人が多いだろうし、カメラも得意な人がいると思うが、それだけでなく基本的には当NPOの考え方に共感し、一緒に事業を作っていくことができる人でなければ受け入れることが難しいと考えている。今までの私たちの活動があり、その事業を基盤にして体験観光の事業を拡大していきたいと考えている。すでに経験があるスタッフに指導者として働いてもらいたいのので、団塊世代の新しい仲間にはいきなりリーダーとして活躍してほしいとは考えていない。

当事者である団塊世代は、今までの仕事の経験を活かして地域に貢献したいと考えている人が多いと思うが、受け入れる私たちは、これまでの自分たちの方法や考え方を尊重してほしいとともに、スタッフとして並列な関係で仕事をしてもらいたいと要望している。

現在、働いているスタッフが団塊世代を受け入れた場合に、困ることを話し合ったところ、団塊世代のスタッフに自分たちがリーダーとして指示を出すのに気を使うということだった。小さな地域の中では年齢による上下関係が存在しているので、団塊世代の受け入れは、広く青森市内から募集するなど工夫が必要だと考えた。

③その他

体験観光のプログラムは本来であれば担当者が自分で開発したプログラムを実施することが望ましいと思うが、今回は団塊世代のスタッフがメンバーになったことを想定して事業を行った。

現行の体験プログラムは、スタッフが参加者の声を聞きながら、私たちが求められているものと、自分たちが提供可能なプログラムを検討して作っている。

体験観光は担当者の個性が生かせる事業だから、実際の事業を行う場合は、団塊世代の人たちが今までの経験を活かして、個性のある青森らしいプログラムを作ってほしいと思う。

5. 今後の課題と展望

①独自の研修の他に認定資格が必要である

体験観光プログラムは担当する指導者が自分の得意なプログラムを実施することになると思うが、趣味の延長ではなく、指導者としても自覚を持つためには指導者の認定を受けることが必要だと思った。当NPOでは、グリーン・ツーリズムインストラクターと自然体験指導者の資格を持つものが体験観光の指導をしている。体験観光を有料で行い、サービスを提供して参加費を徴収するためには、趣味の会のレベルでは許されない。安全確認に十分配慮したプログラムを作り、保険への加入も忘れてはならない。

②専用の事務局が必要になる

体験観光は当日の仕事だけではなく、事前の業務が膨大にあることが今回確認できた。今後、体験観光を本格的に行い事業拡大をする場合には、販売担当や事務局のスタッフが必要になると思った。このように、直接現場で関わる指導者の他にスタッフを抱えるためには、通年で複数のプログラムが提供できるような状態でなければ難しいことがわかった。

江戸ソバリエ認定講座、 江戸ソバリエ ルシック認定講座

————— NPO法人神田雑学大学

1. 事業の目的

江戸ソバリエ認定は、江戸開府400年記念事業として、平成16年に千代田区と協働で行った「江戸の粋を顧みる企画」であったが、その後6年間好評裡に継続している講座である。過去7年間に認定した江戸蕎麦の通人江戸ソバリエは1,150人（合格率71%）に及ぶ。

講座の内容は江戸ソバ学「蕎麦粉」「出汁」「薬味」「器」「歴史」など専門家による座学は「耳学」と名づけ、蕎麦職人による手打ち蕎麦実習は「手学」と称している。また、講座を受けたのち受講生は、「食べ歩き」十軒以上の味覚体験をして「舌学レポート」にまとめ、江戸ソバに向き合う総合的な「脳学レポート」を提出して審査を受けるという仕組みになっている。





平成21年度には、江戸ソバリエの中から「江戸ソバリエ ルシック」という更なる通人を養成する講座を設営した。江戸ソバリエは基本講座を受講した、所謂「通」として教養を持ち、手打ち蕎麦に関する腕があり、食べ歩きによって舌を磨いた人たちである。それに対して江戸ソバリエルシックは、基本講座より専門性の高い講義を受け、手打ち蕎麦実習では、全麵協（全国麵類協働組合）が実施している昇段試験の2段位に匹敵する難関の試験に合格し、厳しい論文審査（蕎麦についての教養・食文化に対する理解・国際的視野等）に合格した者に対して与えられる資格である。

ルシック受講者80名のレポート提出者のうち8名、手打ち蕎麦試験では、手打ち蕎麦職人・全麵協名人位、5段位所有者の審査によって、23名が不合格となった。

しかし、当委員会では、追試験による再挑戦を実施した結果、最終的に受講者80名のうち62名を「江戸ソバリエ ルシック」に認定した。

2. 実施した事業の概要

①「江戸ソバ食べ方名人選定」

- 1) 実施日 平成21年12月
- 2) 実施場所 虎ノ門砂場二階和室
- 3) 事業の対象 江戸ソバリエ ルシック62名
- 4) 事業の内容

平成21年12月江戸ソバリエ ルシック62名を対象に、「江戸ソバ食べ方名人選定」を実施した。昨今、わが国全体に食卓のマナーの乱れが目立つが、特にソバを啜る音を立てる食べ方が話題になっている。日本の食文化の中で、正しいソバの食べ方を「食育」の一つとして確立しておく必要がある、という立場からの提案である。

審査員：須田町まつや 主人 小高 登志氏

：江戸料理なべや社長 福田 浩氏

ソバ：もりソバ

参加者：62名 1回8名×7回 56名

6名×1回 6名

審査の結果3名を「江戸ソバ食べ方名人」として選んだ。

この3名に対する審査員の評価は以下の通り。

- ・もりソバを食べる姿勢がいい。
- ・猪口を手に持つ食べ方が粋である。
- ・ソバを吸る音が快い。

そこで、別途に食べ方名人の食べる様子を専門家によってビデオ撮りし、認定式において披露した。今後、ソバ関係のあらゆる会合において上映し、食育の一環として役立てる予定である。

②「江戸ソバリエ&江戸ソバリエルシック認定式」

1) 実施日 平成22年1月16日

2) 実施場所 文京区民ホール

3) 事業の対象 江戸ソバリエ 47名 江戸ソバリエルシック62名

4) 事業の内容

平成22年1月16日文京区民ホールにおいて認定式を行った。江戸ソバリエの47名に対し認定証カード、江戸ソバリエルシック62名に対しては認定証とバッジを授与し、成績優秀者は壇上にて表彰した。認定式は学校にたとえれば卒業式である。簡単な茶菓だったが、各テーブルの講師や先輩を囲んで江戸ソバリエ、江戸ソバリエルシックの面々は大いに盛り上がった。



3. 事後評価

「江戸ソバリエの社会貢献」

江戸ソバリエのあり方は、個々の社会生活において様々である。

しかし、総じて言えることは以下の5項目に集約される。

- ①蕎麦という植物に、畏敬の念を持つようになった。
- ②ソバという食べ物に、強い愛着の念を抱くようになった。
- ③手打ちソバを打つことによって、健康になった。
- ⑤ソバを介して、定年後なのに親しい仲間が増えた。
- ⑥手打ちソバを通じて社会貢献ができた。

(老人ホーム慰問、祭りに手打ちソバ提供・国際交流※)する機会が増えた。

江戸ソバリエ委員会としても、「江戸ソバリエ講座」「江戸ソバリエ ルシク講座」を通じて社会貢献をしている喜びを感じている次第である。

4. 今後の展望

- ①外国人観光客に対する日本文化体験プログラムの中で、手打ちソバ体験の指導を行う。
- ②2010年4月、米国サンフランシスコ日本人町の咸臨丸周航150年記念フェスティバルに16名参加・手打ちソバ披露の民間外交を行う予定である。

学びの先へⅡ

NPO法人 エンツリー

1. 事業の目的

生涯学習の気運の高まりとともに、特に女性たちにおいては子育て中、中高年世代など、さまざまなライフステージでの「学び」が盛んである。しかし、その成果を生かして何らかの形で社会参加しようと思っても具体的方策が見つからないためにやむを得ず「学び」が個人の「趣味」となってしまう例が少なくない。しかし、個々の「学び」の蓄積は、隠れた社会的資源であり、それを埋もれたままにしておくのは大きな社会的損失であるといえよう。

「学びの先へⅡ」は、さまざまな「学び」を積んだ来場者に対し、その「学び」を生かした社会参画への具体的イメージ、強い意欲を生み出すことを目標としている。同時に一歩先に社会参加を果たしている出展団体同士の新しいネットワークを構築し、あたらしい事業の創出をも目標としている。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

主催：(社) 学術・文化・産業ネットワーク多摩 中央大学研究開発機構

NPO 法人エンツリー

共催：国土交通省国営昭和記念公園事務所

(財)公園緑地管理財団昭和記念センター



3. 実施した事業の概要

1) 実施日

平成 21 年 10 月 16 日(金) 出展者説明会
 平成 21 年 11 月 18 日(水)・19 日(木) 会場設営
 平成 21 年 11 月 20 日(金)・21 日(土) イベント開催

2) 事業場所：国営昭和記念公園 花みどり文化センター

3) 事業の対象

- ・「学び」を生かして何らかの社会参加を果たしたいと考えている人々。
- ・自分の中にさまざまな「学び」の成果を蓄えながら、それが社会的資源であると気づいていない人々。

出展団体 NPO、市民団体、個人事業主、企業など 29 団体（展示出展のみ 1 団体）

来場者数 11 月 20 日 1,029 名

11 月 21 日 1,520 名（集計：昭和記念公園花みどり文化センター）

4) 事業の内容

さまざまな「学び」の成果を生かして現在活動中の NPO、団体、個人、企業などにブース出展を依頼し、それぞれの活動の紹介とともに、出展者と来場者が親しく言葉を交わすことにより、来場者が一歩社会に踏み出すための意欲創出、疑問解消をはかる。



- ・ブース出展 28 団体（個人を含む）

【NPO】

NPO法人シーズネットワーク（多摩市・女性の社会参加支援など）

NPO法人子育てコンビニ（三鷹市・子育て支援など） 他 4 団体

【企業・その他の法人】

株式会社キャリア・ママ（多摩市・働きたい女性のためのサイト運営他）
 東京しごとセンター多摩（就労相談。相談コーナー設置）他2団体

【市民団体】

草の根メディエーションの会（八王子市・紛争解決、和解支援）
 八王子デイグループわくわく（八王子市・障害者支援）
 わくわく紙芝居サークル（八王子市・紙芝居ボランティア）他7団体

【個人】

工藤いづみ（青梅市・手織り作家）
 FP 吉岡みちる（ファイナンシャルプランナー。相談コーナー設置）他6名

- ・展示コーナー 2（援農ボランティア紹介コーナー、NPO 紹介コーナー）

新しい社会参画の視点として農業を取り上げ、多摩地域の自治体の「援農ボランティア」制度紹介コーナーを設置した。

- ・ワークショップ

機織り体験、ハーブ石鹸作り、カラーセラピー、パペット（人形）作り体験他



- ・演劇～パネルディスカッション

学んだことを社会に発信する手段として、演劇を選び活動している「劇団さくらっ子」の演劇上演に続き、同じ演劇という手法をとりながら多彩な活動を展開している方々の体験を聞くパネルディスカッション「学びから実践へ～思いを伝える」を開催。来場者に新たな気づきを提供した。

パネリスト 清水武子（劇団さくらっ子 代表）

吉原廣（NPO 法人市川市民文化ネットワーク代表理事）

滝沢祐有子（ポコ・ア・ポコ代表）



4. 事後評価

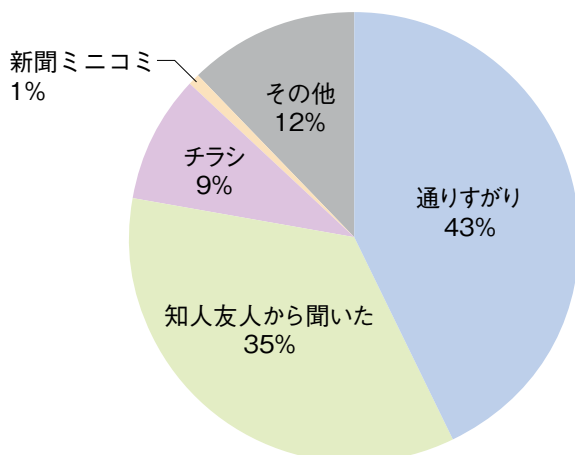
本イベントは幅広い年齢層の来場を促すため、平日、週末の両方を含む、金・土、2日間の変則的開催としている。今年は前日まで冷たい雨の日が続いたために、20日（金）は晴れたものの来場者の出足は遅かったが、公園内のいちごの黄葉を楽しみに訪れた中高年の来場者が多かった。通常、こういったイベントでは、イベントを目的とする来場者がほとんどである。

しかし、昭和記念公園花みどり文化センターで行われるイベントでは、公園を訪れる際に「通りすがり」に立寄る来場者が多数を占めることも少なくない。

今回のアンケートでも半数近くが「通りすがり」と応えている。

当該場所を会場に決定した要因の一つがその点にあり、社会参加の具体的方法を知りたいという明確な目的を持つ本来の来場者の他に、何気なく立寄ったイベントで啓発される人の出ることを期待しており、アンケートにも見られるように今回も、その効果は十分に達成できたと考えている。

来場のきっかけ（アンケートより）



来場者の声（アンケート自由記述より抜粋）

- ・活動に関わる方、オーナーから直接お話しがうかがえて良かったです。
- ・すごく興味のある情報が多くて良かったです。
- ・女性が働いている環境はいくらでも作れるんだ！と思いました。
- ・いろいろな地域でいろいろな方たちが活動していると感じました。
とても刺激になり楽しかったです。
- ・カラーセラピーには興味があります。自分に合うヒントを得ました。
- ・地元で行われている活動が分かって良かった。
- ・通りすがりですが、とてもよい勉強になりました。ありがとう。

NPOや市民団体の多くは、お互いにそう遠くない地域で活動しているながら行政区域、事業種別が異なると、全くといっていいほど交流がないのが実情である。この状態を打破するため、「学びの先へ」では来場者とだけでなく、出展者同士の交流も強く事務局から呼びかけている。

昨年度に引き続き今年度も出展者同士が交流を深め、お互いの情報交換の中で新しいビジネスコラボレーションを模索したり、お互いのネットワークを紹介しあったりというダイミクな動きが生まれつつあるのは大きな成果と言えよう。

5. 今後の課題と展望

今回は、開催場所である昭和記念公園との調整の遅れから、新聞、ミニコミ紙へのプレスリリースの時期が遅れ、掲載日がイベント直前という事態を招いてしまったことは、来年以降、開催場所の選定も含めて大きな課題を残したといえる。

しかしながら、昨年度の実績を見ても当イベントの効果は、一年間かけてじわじわと発揮されてきた。

例) 来場者がNPOやグループの活動に参加を申し出た、

来場者から出展者宛に各種問い合わせがあった、

出展者同士が協力して新しい商品、ビジネスモデルの開発を始めた等。

この点については今年度も同様と考えられ、すでにその効果の報告も出展者より徐々に送られてきている。

例) 出展者に対し、来場者の居住する地域での催しへの参加依頼があった。

出展者同士が集まるグループができ、お互いのビジネス、活動についてアドバイスなどを行っている等。

上記の成果を考えると、「学びの先へ」が来場者、出展者ともに大きなきっかけ作りとなっていることを確信し、中間支援組織（インターメディアリー）としてアフターフォローを続けるとともに、厳しい経済状況の中ではあるが来年度以降の引き続きの開催を検討している。

社会貢献型カルチャーツアーの開発

————— NPO法人静岡県生きがいつくり協会

1. 事業の目的

仕事やNPO活動で長年培ってきた、知識・経験・能力・人脈等を使って会社とコラボで事業開発をすることにより収入を得ながら社会貢献ができないか。

旅行会社とコラボで21世紀の新しい旅のスタイルとして社会貢献・生涯学習・体験・交流をマッチングした「ニューツーリズム」を開発・試行する。

■各ツアーの目的

第1ツアー：不況しらずの経営と人脈まるもうけ

- ・不況期における経営の考え方、視点、工夫、知恵を学ぶ。
- ・人脈を拡大する。

第2ツアー：めっけもん安全・安心農家収穫体験

- ・生産者と消費者を結び付ける。
- ・健康な心身をつくるために食品の選び方を学ぶ。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

当協会と株式会社生きがいつくり研究所（静岡県知事登録旅行業第2-557号）のタイアップ

実行責任者：佐藤 清（協会理事長兼研究所取締役社長）

副責任者：正木 京子（協会事務局兼研究所取締役）

★役割分担

・当協会

企画、運営、講師、講師依頼、募集案内の作成、参加者募集

・株式会社生きがいつくり研究所

バスとお弁当の手配、行程の作成、参加者の受付・問合せ、参加者募集

3. 実施した事業の概要

1) 実施日

- ・第1ツアー：不況しらずの経営と人脈まるもうけ 12月2日（火）
- ・第2ツアー：めっけもん安全・安心農家収穫体験 12月20日（日）

2) 実施場所

- ・第1ツアー：静岡県浜松市、三重県松坂市
- ・第2ツアー：静岡県三島市、伊豆の国市

3) 事業の対象

- ・第1ツアー：経営者（23人）
- ・第2ツアー：消費者（23人）

4) 事業の内容

・第1ツアー

- ①各地発：三島駅北口、沼津駅北口、清水IC
- ②不況期でも業績を伸ばしている会社訪問：京丸園株式会社
作業所を巡りながら、直接代表より、考え方、創意工夫等を伺う。
- ③不況期でも業績を伸ばしている会社訪問：有限会社モンマルトル小泉
お店で、差別化商品を試食しながら、直接代表より、経営や広報戦略、創意工夫等を伺う。
- ④各地着：三島駅北口、沼津駅北口、清水IC
- ⑤バスの中で行ったこと。
 - ・バスを降車毎にクジで座席を決め、名刺交換や情報交換を行う。
 - ・御在所SAで人気のお土産当てランキングクイズを行う。第1位と第2位当て。
当たった方には、経営コンサルタントのサイン入り著書をプレゼント。
 - ・昼食はバスの中で速弁の「きじ会席弁当」
 - ・自己紹介、感想や学んだことを発表
 - ・経営コンサルタント杉井保之様から、訪問する2社の見学視点、目的等の説明。不況期における経営の考え方やインターネット活用の講義。
 - ・松坂市の駅前のシャッター通り街をバスの中から見学。松坂市の観光名所の説明。
 - ・アンケートに記入いただき回収する。



・第2ツアー

①各地発：富士宮駅前、富士駅南口、沼津駅北口、三島駅北口

②小林農園で収穫体験とお話とお買い物

③「めっけもん」でお買い物

④高橋農園で収穫体験とお話と昼食とお買い物

昼食は旬の野菜を使った健康料理

⑤ヤーコン舎の畑で収穫体験とお話とお買い物

⑥「興水酒店」でお話とお買い物

⑦各地着：富士宮駅前、富士駅南口、沼津駅北口、三島駅北口

⑧バスの中で行ったこと

- ・ NPO法人健康食品119番理事長の鍵山安男様より「間違いだらけの食情報知らなきゃ損する食品の選び方」の講義を受ける。
- ・ アンケートに記入いただき回収する。

4. 事後評価

仕事やNPO活動で長年培ってきた、知識・経験・能力・人脈等を使って会社とコラボで事業開発をすることにより、①収入を得ながら社会貢献の可能性と、②社会貢献型カルチャーツアーの2点で評価を行う。

①仕事やNPO活動で長年培ってきた、知識・経験・能力・人脈等を使って会社とコラボで事業開発をすることにより収入を得ながら社会貢献の可能性

- ・会社とのコラボで収入を得ながらの社会貢献活動の実現性が高まった。
- ・会社とのコラボでお互いの強みを活かし、弱点を補うことができた。
また、広報で協力できたのは大きなメリットであった。
- ・これからの日本社会の方向性にマッチしているので、課題を解決していくことにより大きな発展が望めると考える。

②社会貢献型カルチャーツアー

- ・新しい取組みとして、バスの中を教室や交流の場になるか、チャレンジしてみたが、十分なりえることがわかった。
- ・アンケート等でニーズがあることがはっきりしたのでニューツーリズムとして成り立つことがわかった。
- ・直接現場で学ぶことは、参加者にとって大きな魅力となった。
- ・目的の明確化は、参加者との終了後の継続性を生み出すことが可能である。

5. 今後の課題と展望

評価同様2点で課題と展望をまとめた。

①仕事やNPO活動で長年培ってきた、知識・経験・能力・人脈等を使って会社とコラボで事業開発をすることにより収入を得ながら社会貢献の可能性

★課題

- ・NPOと会社との信頼関係の構築が難しい。
- ・NPOと会社をコーディネートする人や組織が必要となる。
- ・NPOの経験・能力・人脈・強み・弱みを洗い出し、己を知らなければならない。
- ・当面は金銭面での支援が必要である。

★展望

- ・NPOと会社とのコラボから、今までに無い新事業が生まだされ、経済情勢が厳しい今後のNPO活動の一方向性として期待できる。

②社会貢献型カルチャーツアー

★課題

- ・継続してマーケットを調査し、企画に反映させなければならない。
- ・内容が異なるツアー企画数を増やし、実施してニーズに合う企画を選択する。
- ・社会貢献型カルチャーツアーという言葉を広める努力が必要となる。
- ・通常のツアーより対象者が少なく、値段が割高になるので、高価値化と広報戦略が重要となる。

★展望

- ・継続して試行ツアーを実施して、マーケット調査と企画の研究を深めることにより、通常のツアーとしての商品化が可能となる。

生きがい一座による生きがい支援事業

滋賀県健康生きがいづくり協議会

1. 事業の目的

- ①高齢者の生きがいづくり支援を団塊世代以降のコミュニティ・ビジネスとして立ち上げ発展させる
- ②滋賀県下の市町村社会福祉協議会が運営している“地域シニアサロン”や民間の有料老人ホーム運営の実態調査をする

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

滋賀県健康生きがいづくり協議会のメンバーから選ばれた7名で、プロジェクトチーム（生きがい一座）を立ち上げた。構成は男性2名女性5名で、地域性も長浜（北部）・草津（南部）・大津（湖西）とほぼ全域から代表となるように考慮した。またスタッフ経歴は、保育士資格・幼稚園教諭資格・ヘルパー資格・レクレーションインストラクター・歴史愛好家・ハーモニカ愛好家・ヨシ笛愛好家などバラエティーに富んだ人員で構成した。実行までに数回の会議を持ち、提案や実施スケジュールの検討をし、対象者に対する内容を決定した。そして実行対象となりそう各市町村の社会福祉協議会の活動団体や有料老人ホームの選定等の交渉に入った。また“堅田おしゃべり会”とも連携し、対象者に対する内容等を調査・研究し協力体制を築いた。その結果下記の団体で実施調査する事になった。

3. 実施した事業の概要

【3-1】ふれあいサロンクリスマス会

実施日：平成21年12月16日（水）

実施場所：大津市堅田市民センター

各種団体との連携：堅田学区社会福祉協議会・堅田学区民生児童委員協議会

滋賀県健康生きがいづくり協議会・堅田おしゃべり会

事業の対象者：大津市堅田学区在住高齢者（55名） おしゃべり会（21名）

大津市堅田学区民生児童委員協議会（13名）

滋賀県健康・生きがいづくり協議会（7名）



【3-2】シニアサロン立ち上げ協力、クリスマスパーティー、お琴とお話、ドラえもん劇団「水戸黄門の巻」

実施日：平成21年12月23日、22年1月23日、2月25日、3月24日

実施場所：南草津マンション

各種団体との連携：草津学区社会福祉協議会・マンションシニアサロン役員

事業の対象者：マンション住民（高齢者含む）18名



【3-3】ふれあいサロン支援「ほのぼのサークル～お正月お楽しみ会～」

実施日：平成22年1月27日

実施場所：草津市志那中町自治会館

事業の対象者：80歳以上高齢者（25名）

民生児童委員・サロンボランティア10名

滋賀県健康生きがいづくり協議会（4名）

おしゃべり会（2名）

各種団体との連携：常盤学区社協・志那中町自治会 町内健康推進委員・民生児童委員協議会

【3-4】生きがい一座活動

実施日：平成21年11月16・26日、12月3日、22年1月15日、2月17日、3月11日

実施場所：ぐらんし〜る近江神宮

各種団体との連携：ぐらんし〜る関係者・滋賀県健康生きがづくり協議会・

堅田おしゃべり会

事業の対象者：ぐらんし〜る居住者（12名）滋賀県健康・生きがづくり協議会（5名）

堅田おしゃべり会（2名）



【3-5】生きがい一座活動

実施日：平成21年12月15日、22年1月15日、2月1・17日、3月11日

実施場所：ハーネスト唐崎

各種団体との連携：ハーネスト関係者・滋賀県健康生きがづくり協議会・堅田おしゃべり会

事業の対象者：ハーネスト居住者（10名）滋賀県健康生きがづくり協議会（5名）

おしゃべり会（2名）



4. 事後評価

【3-1～3】『地域サロンの場合』

成果

- ・各地域サロンのスタッフより今回の“生きがい一座”の講師活動は、今までの地域サロン活動より一ランク上の内容であったとの評価であった。
- ・イベントとして参加した所からは講師料をいただき、他も少なくとも交通費程度の収入をいただいた。
- ・各サロンとも今後も協力いただきたいとの要請があった。
- ・南草津のマンションの場合は、シニアサロン全体の企画運営を滋賀県健康生きがいづくり協議会で提案する方向になりつつある。

課題

- ・今後長く続けるためには、滋賀県健康生きがいづくり協議会だけではなく、近畿ブロックおよび財団とのネットワークが必要である。

【3-4～5】『有料老人ホームの場合』

成果

- ・回数を重ねるごとに参加者の表情がいきいきとしてきた
- ・最初は子どもだましみたいと思いながら参加していた人も、何度かしているうちに楽しみに変わってきた
- ・休憩時間のおしゃべりでは、スタッフに生き生きと話しかけてきた
- ・次回を楽しみにしている状況がうかがえた

課題

- ・支援から介護という幅のある参加者を一緒にまとめる活動は難しい
- ・お話タイムの内容を理解できない人もあり、内容の選択が難しい
- ・全員参加は施設のプログラムもあり難しい
- ・コミュニティ・ビジネスとして成立させるためにはおしゃべりが適切である。
- ・季節ごとのイベントも必要である。
- ・対象者が参加できるメニュー作りが必要である。
(対象者一人ひとりが中心になる内容のお話が必要である。)

5. 今後の課題と展望

【3-1～3】『地域サロンの場合』

- ①地域の社会福祉協議会と連携し、社会福祉協議会組織の中に滋賀県健康生きがいづくり協議会組織を組入れる動きをする必要がある
- ②有償のボランティア活動の普及を行い、交通費と最低労働賃金を明確にし、活動の継続に寄与させることが重要である。

【3-4～5】『有料老人ホームの場合』

- ①経営者の意識改革が必要である。

この事業が高齢者にとって価値ある事であることの意識改革と経費の捻出を考慮すること。コミュニティ・ビジネスには至らなくても、ボランティアを長く続ける為には交通費プラスアルファの経費の予算化をすること。

- ②今後は、対象者に個人として接し、おしゃべりをする事が重要である。

将来、公的事業（介護保険の中の項目に“おしゃべりタイム”として時間当たりの単価で補助金を出すことを認めるなど）に組み込まれることを提案する。

かつらぎ町花園こむぎの郷 「深秋の紅葉まつり」

—— 和歌山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会

1. 事業の目的

地域活動をしていると団塊世代以降の年代の人の姿がなかなか見えてこない。

地域で、もっと活発に活躍してくれたらと思っているのは、私だけでしょうか？

そこで、この年代の人に話を聴いてみると社会貢献をしたいが、何をすればいいのか？また、その中になかなか入っていけないとの意見が多かった。

半数以上の団塊世代以降の人たちが、社会貢献を始めたいと答えている。

この事業は、都会と田舎のシニアもミドルも一緒になり世界遺産の高野山の麓に抱かれる自然豊かな山村地域で体験学習の実践を行なった。

【花園こむぎの郷「深秋の紅葉まつり」】

- ①生活環境の異なる都会の人と田舎の人が一緒になって「健康づくりの体験」をし価値観の共有化を図る。
 - ②健康と生きがいの交流のなかで、夫々に「喜びを分かち合える」ことの大切さと心豊かになれる楽しさを認知する。
 - ③身近に容易に社会貢献ができることを学習すると共に、自然豊かな田舎の文化を感じ、自分の住む地域にも「地域のふれあい文化」があることを認識する。
- 1) 高齢者の人口は、今後増加を続け、25人に1人が高齢者、4人に1人が後期高齢者（平成25年）となり、高齢化率は上昇を続け、超高齢社会の到来が予想されます。
 - 2) 超高齢社会の到来を見込み、種々のニュースポーツを通し仲間づくりを推進し、高齢者の健康・生きがいつくりを支援する。
 - 3) ニュースポーツが小地域内において、日常生活の一部として、継続的に取り入れ、市民運動へと普及振興を図る。
 - 4) この事業を推進することにより、自らの仲間づくり、生きがいつくりを実践する。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

主催：和歌山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会

財団法人 健康・生きがい開発財団

共催：社会福祉コミュニティー 花園こむぎの郷

社会福祉法人 一麦会 麦の郷

NPO 法人 WAC わかやま

NPO 法人 新和歌山 NPO

和歌山ディスコン協会

情報ステーション和歌山

団塊の世代バンド オールデイズ

健康生きがいつくり一座

連携：かつらぎ町役場

かつらぎ町役場 花園支所

かつらぎ教育委員会

かつらぎ町立花園中学校

花園警察駐在所

3. 実施した事業の概要

1) 実施日：平成21年11月28日（土）、平成21年11月29日（日）

2) 実施場所：和歌山県伊都郡かつらぎ町花園（高野山の麓に位置する過疎化が進む山村地域）

- ・花園集会所
- ・花園こむぎの郷
- ・花園中学校



3) 事業の対象：

【シニア・ミドル チャレンジ】健康生きがいづくりまつり

都会の中高齢者を過疎化が進む山村の田舎へバスで移動、自然豊かな地域を田舎の中高齢者と一緒になって、健康と生きがい交流を楽しんだ。

地域の協力者を含めた延べ人数 約200名

参加者	花園集会所	65名
	花園こむぎの郷	60名 (内宿泊者 45名)
	花園中学校	60名

4) 事業の内容

花園の自然を有効に活用した事業展開と都会の人も田舎の人も交流できる企画とした。

①花園に伝わる古典芸能の紹介

古くから伝わる夫々の言い伝えを解説しながら紹介する。

「御田の舞」「仏の舞」「花園和太鼓」など

②健康生きがいづくり一座の公演

笑いあり涙ありの楽しい交流型の歌謡ショーで、心豊かな文化を提供

「銭太鼓」「南京玉すだれ」「腹話術」「赤穂浪士」「岸壁の母」「フラダンス」「奄美大島の踊り」「バンド音楽歌謡ショー」など



③健康レクリエーション体操

みんなで大笑い！「うた体操」「大笑い体操」「ストレッチ体操」など

④お餅つき

シニアとミドルの絶妙なコンビネーション！「杵でのお餅つき」「おはぎ作り体験」など



⑤夜の満点の星空コンサート

猪や鹿も観客！「団塊の世代バンド音楽：オールディーズ」「芸術文化の水墨画」など



⑥ニュースポーツ大会

明るい体育館でのびのび！
「花園ディスコンカップ」
「バスケットピンポン」など



4. 事後評価

【評価】

和歌山市から2時間足らずの高野山の麓に開けた自然豊かなやすらぎと癒しを感じる元花園村は、和歌山県の北部に位置する過疎化が進む小さな山村の田舎で平成17年に伊都郡かつらぎ町に編入合併された。地域の住民は500人足らずで多分にもれず高齢化が進んでいる。4人の子どもたちが通っている山に描かれた壁画がある美しい中学校も、今年の春には休校になることが決まっている。

今回の実施した事業により都会と田舎のシニア・ミドルの人たちとの交流を通し課題の健康と生きがいについての交流の中でお互いに不足しているところ及び、秀でているところが認識できたと考える。また、自然豊かな花園に住みたいとのことで花園の人たちとの新たな交流が始まっている。

【成果】

地域に密着した支え合いの活動とは、「ひとづくり、地域づくり、ゆめづくり」であると考え。人々の「つながり」と「支え合い」から多種多様な地域活動が生まれ、人がつながり、地域がつながり、みんなの夢の実現に向かって着実に歩み進め、つながっていく。

今回の事業は団塊世代以降の人たちをどのように地域社会に巻き込んでいくかが課題である。つなぐとは、特別な人たちが継承するものではなく、又、法律や施策等の制度化されたサービスや事業のみによって実現されるものでもない。

今回の事業、かつらぎ町花園こむぎの郷「深秋の紅葉まつり」のように様々な団体や個人及び行政と一緒に、参画、協働を行なっていくことが大切である。

近年は、児童や高齢者への虐待、孤独死や自殺問題、地震の発生を想定した要援護者支援の課題など、新たな社会課題への対応が早急に求められている。

そのためにも、地域社会での支え合い、つながり作りは大切である。

今回、参加した団塊世代以降の人たちは、つなぐことの大切さを理解し、また、その意識が芽生えたものを感じる。

シニア・ミドル チャレンジャーが感じたこと

- (1) 都会の人も田舎の人も同じ悩み 「困ったときはお互いさま」
- (2) 自分のできることが見つけられた 「身近な助け合い」
- (3) ゆとりある働き方を考えさせられた「休暇の活用」
- (4) 誰もが気軽に集える場があればいい「居場所づくり」
- (5) 子どもも若者も障がい者も高齢者も「つながっている」

5. 今後の課題と展望

① 「ワーク・ライフ・バランス」の発信：

地域活動をしていると、現役勤労者の姿が見えない。

もう少し地域でも活動してくれればと思うのは私だけでしょうか？

しかし、勤労者の半数以上は地域活動への関心は高く、事実、参加した人は積極的にこれからは、ボランティアに参加したいと話していた。

新しい地域の支え合いの担い手としてシニア・ミドルの人たちと一緒に、どのように係わりを持っていくか？つないでいくか？が大きな課題であると考ええる。

ワーク・ライフ・バランスの意義を発信していきたい。

② 「寺子屋」で伝承：

元気な高齢者が余生をどのように過ごそうかと考えている。

機会があれば、皆さんに、若い人たちに伝承する役目があり余った人生ではない！と話している。

しかし、伝承できる寺子屋的ふれあいの場作りが必要と考えられる。

③ 「ひきこもり」を支える：

ひきこもりや不登校の若者達が多くなっている。

ひきこもりは160万人以上とのことであるが実態は定かになっていない。

この人たちは、普通に健康な身体を持ち問題ないと言われている。

そんな若者達が気軽に働ける場所として、相談できる場所として、自然豊かな田舎が心の回復に役立つものと考えられる。

軽く背中を押してあげることができれば元気を取り戻すことができる。

田舎の休校になった学校をうまく活用していきたい。

生きがいつくりサポーターの人財力向上 & 交流推進事業

——— 岡山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会

1. 事業の目的

高齢者が充実した生活を送れるよう、生きがいつくりサポーターの存在は重要になるとともに、さらなる資質の向上が求められる。そんな中、高齢者の多様なニーズに、対応するための、総合的な知識やスキルを身につけたり、互いの情報交換や連携を促進する講座を開催し、生きがいつくり活動の活性化を図り、明るい長寿社会実現に寄与する。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

「健生おかやま」と「岡山高齢協」がコンセプト共有し、役割分担、進行表等作成。

岡山県教育委員会・岡山県社会福祉協議会・山陽新聞社の後援を受けた。

3. 実施した事業の概要

実施日：平成22年1月16日（土）第1回、

平成22年1月30日（土）第2回

実施場所：岡山県総合福祉・ボランティア・NPO会館 7階（703会議室）

事業の対象：第1回 生きがいつくりサポーター（22名）

第2回 生きがいつくりサポーター（12名）

事業の内容：第1回

①対談『健康な地域と生きがいある高齢者像を求めて』



中瀬 克己 岡山市保健所長

河田 幸男 岡山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会会長

①昼食と事例発表『地域社会における私の生きがい創造活動』

コーディネーター 吉田 公子 「健生おかやま」幹事

②講義『生きがい創造計画基本論』

講師：平井 一郎 「健生おかやま」副会長

第2回

①座談会『深めよう！異世代・異コミュニティーとの交流』

②ブッフエスタイルの生きがい創造カフェ

『生きがい創造活動の新たな旅立ち』

4. 事後評価

生きがいつくりサポーターが孤立することなく、色々な世代や地域の人とふれあいつつ、スキルアップできる場を提供し、互いに切磋琢磨することで生きがいつくり活動が活性化する効果をもたらした。従って必要性のある試行事業と判断し、今後このような事業を可能な限り継続的に取り組みたい。

但し、協働事業として目的やコンセプトは共有できたものの、役割分担が不明瞭であったので今後は具体的な事業内容を明確にする必要がある。さらに事業の主催者と生きがいつくりサポーターがどのように関わっていくか具体的なビジョンも示していきたい。

○成果の概要

経験したことのない超高齢社会が急激な勢いで進行する中、団塊・シニアの誰もが、いつまでも、健やかに、生きがいを実感できる活力のある社会を構築するために、生きがいつくりサポーターの存在価値は益々高まっている。そして、それに伴いサポーターの資質の向上や環境整備が以前にも増して要求されてくる中、今回の事業はサポーターの日頃の活動における意識向上と共に、安心して活動できる環境づくりに寄与できたものであり、地域・県・国家の重要課題である明るく輝く高齢社会実現に向けた取り組みができた。

※独創性の面における工夫

「ローマは一日にして成らず」といわれるように、今回の企画も単に思い付きだけでは不可能で、「健生おかやま」設立以来6年間の地道な活動が基になっている。特に平成20年9月より21年3月にかけて実施した「セカンドライフの生きがい創造ジョイフル講座」において、県内に

おける「団塊・シニアの社会貢献を視野に入れた生きがいづくり」のニーズを把握したうえで、その一部分を可能な限りで具体化した。活動資金や知名度もない「健生おかやま」にとってできることはこの程度のことにはすぎない。しかしこの潜在価値をいち早く見抜いて一部分といえどもそれを具体化させたことは、今後の生きがい創造活動をさらに発展さす原動力になりうるので、そのことが独創的といえるのではと思う。

※先駆性の面における工夫

一口に団塊・シニアの生きがいづくり活動といってもそのフィールドによる特性に違いがあり、さらにそれに携わっているサポーターの個性も異なるので、多種多様な活動の形態が存在してしかりだと思う。しかし今後ますます複雑多様化する団塊・シニアの生きがいづくり活動を推進する上で、サポーター自身のスキルアップや世代や地域を越えた交流、さらに協働といった発想も生じるのは必至で、それらの必要性を意識した事業を気軽に参加できるスタイルでいち早く展開した点では先駆的な事例になりうる。

※事業の成果から開発・発見した具体的な事例

- ★対談を依頼した行政担当者（岡山保健所長）も「健生おかやま」の活動に関心を抱き、さらに活動を共にしたい意向もあることが把握でき、今後の活動領域が広がった。
- ★県内における多種多様な芸術家の生きがい創造活動を展開している団体と様々な分野で共同路線が実現できそうになった。
- ★県内の中山間地帯で、耕作放棄地を有効利用しつつ、3世代の生きがい創造事業を展開しているサポーターと交流が実現できそう。
- ★民生委員として地域の生きがい創造活動を展開しているサポーターとの交流が実現できそう。
- ★気の合った参加者同士による「生きがい創造活動お役立ち交流会」を企画中。
- ★参加者がさらなるスキルアップを目指し「健康生きがいづくりアドバイザー」資格取得を検討中。

※事業の成果の今後の発展及び波及の見通しなど

晴れの国岡山は、人口構造の高齢化が常に全国水準より高く推移しており、団塊・シニアの生涯現役・生涯活躍は最重要課題であり、その意味においては今回の事業は的確に的を射たものであり、参加者からも高い評価を得ており、それなりの事業成果は有ったと思われる。また県内の関連組織にもメッセージを発信しており、「健生おかやま」の存在意義を再認識していただくとともに、生きがいづくりの啓発に寄与できたと思う。

ただ今回の事業が一過性のもので終了してしまったのでは無意味になるので、今後は既存の「出

前講座」の主力講座として位置づけ、関連する組織や団体に積極的に発信していけばかなりの波及効果は期待できると感じる。出前講座はスタートして3年目を迎えるが、スローながら着実に実績を積み、新たに企業研修などの受注も入り始め、今年は一気に飛躍の年にして行きたいと願っていたところで、今回の事業成果はまさに渡りに船であった。担当した「健生おかやま」自身も多くの学びを味わせていただいたのみならず、「コミュニティ・ビジネス」として自立できる可能性が広がった。

具体的には地域の行政&社協&企業等と協働してそれぞれの地域で「生きがい創造講座」などを、協働（相手が主催者でスポンサー、健生おかやまは講師派遣）事業として展開していければと考えている。

5. 今後の課題と展望

日本の未来は、高齢、少子、人口減少、労働力の減少、経済の停滞、社会保障制度の崩壊などと暗雲が立ち込めている。「晴れの国おかやま」もしかりである。そこで官民一体の活力ある高齢社会に向けた取り組みが必要である。そのような現状下において、主として団塊・シニアの健康・生きがいづくりのプロ集団である「健康生きがいづくりアドバイザー協議会」の存在意義はますます高まっていくと予想される。また我々自身もそれを少なからず意識しつつ6年間に渡り多彩なアクションを展開してきたつもりである。しかし我々の活動は地元でもほとんど評価されることもなく、認知度も低いままである。その本質的な課題はいままでの活動成果を効果的に発信できていないことが大きな要因である。そのことが、脆弱な組織のままであり、またアドバイザー自身のモチベーションの向上に至らないという悪循環に陥っていると感じる。団塊・シニアの健康・生きがいづくりの重要性のさらなる高まりと、われわれ協議会とのギャップをいかに克服するか、このことを本事業の展望にしたい。下記のようなステップを通じ実現の可能性があるのでと考える。

- ★「健生おかやま」自らの組織の方向性をどのように描き、取り組んでいくか明確に示す。
- ★有給スタッフの設置が実現しないまま月日が流れていく中、運営体制の核を充実させ、組織力の強化、事業の実施能力の向上、さらに対外的な信用力アップを図る。
- ★サラリーマンOBが増加傾向にあり、団塊・シニアの社会貢献を視野に入れた多彩な生きがいづくりが求められてくる中、「健生おかやま」の社会的役割をどのように捉えていくか明確に示す。
- ★地域社会で多様な主体同士を上手にコーディネートし、社会の課題に取り組んでいく。
- ★地域の様々な課題に対し、地域・世代を超えた議論の場を提供する。
- ★小規模でも、継続的で安定的に展開できる「コミュニティービジネスモデル」を作り上げる。
- ★団塊・シニアの生きがい創造という課題に対し、関係組織・団体間同士で交流・意見交換することで、総体としてのインパクトを持った協働事業を幅広く展開する。さらに、行政、企業、地域組織、さらに全国の協議会等との協働も視野に入れる。
- ★行政が生きがいづくりの制度を整える役割を担うに対し、われわれは制度にないニーズや少数のニーズを発見し、それらにフレキシブルに対応することでより存在価値を高めていく。

生きがいアドバイザー・生きがい情報士による 過疎地支援モデルへの人材育成講座

——— 社団法人コミュニティネットワーク協会

1. 事業の目的

人口約7000名、高齢化率38%の過疎地、島根県吉賀町において、地域資源である高齢者の方々のちょっと仕事を創りだしていくため、都市部との交流と養成講座の試行を実施し、有償ボランティアの組織化を目指すことを目的とする。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体との連携

蔵木メ繩会：

吉賀町蔵木地区で約30年にわたりしめ縄飾りや布草履づくり、竹細工などを行っている。当会がワークショップでの参加者へのしめ縄飾りづくり指導や、地域での活動報告を行った。また、ワークショップの進め方や事前の準備等を打ち合わせを重ね行った。

山口県健康生きがいづくりアドバイザー連合会：

「地域資源を活かしたまちづくり」のテーマで、当日に生きがいづくりとまちづくりを連動させた事例紹介を含めた講演を行った。

吉賀町企画課：

当日の広報協力、会場掲示題目等の作成を行った。

学校法人六日市学園六日市医療技術専門学校：当日の広報協力、会場提供を行った。

上記各団体の役割分担のもと、社団法人コミュニティネットワーク協会の連携により事業を実施した。

3. 実施した事業の概要

1) 実施日：平成22年3月7日（日）

2) 実施場所：学校法人六日市学園 六日市医療技術専門学校 教室

3) 事業の対象：吉賀町在住者（14名）（幼児2名含む）

六日市医療技術専門学校介護福祉科1年生及び関係者（7名）

蔵木メ繩会（4名）

山口県健康生きがいづくりアドバイザー連合会（3名）

4) 事業の内容

<実施プログラム>

12:30 受付開始

13:30 開会 司会者挨拶

13:10 講演「伝統資源を活かしたまちづくり」



講師：山口県健康生きがいづくりアドバイザー連合会 福森宏昌さん、畑山静枝さん



長谷川進一さん

14:10 蔵木メ縄会の活動について



蔵木メ縄会 大庭忠男さん

14:20 休憩 ワークショップ準備

14:30 しめ縄飾りづくりワークショップ



講師：蔵木メ縄会のみなさん

16:00 ワークショップ終了 閉会

16:15 後片付け 散会

<内容>

・講演

少子高齢化時代の到来や地方の現状を人口動態などのデータを基に、生きがいつくりとまちづくりを如何に連動させてゆくかが問われているという時代背景を解説。その上で各地の生きがいつくりとまちづくりを連動させた事例とそのポイントを紹介。また、各自が実践している生きがいつくりやまちづくり活動の事例を紹介し、この地でしめ縄飾りづくりで生きがいつくりとまちづくりを連動させてゆく地域的意義の感想をお聞きした。

・ワークショップ

蔵木メ縄会の皆さんの指導のもと、しめ縄飾り作りを参加者ひとり一つ行った。25名の参加者が5～7名程度のグループになり、参加者同士で教えあう様子が見られた。

・アンケートの実施

当日参加者にアンケートを実施し、会の感想等を記入していただき、会の評価を試みた。

4. 事後評価

■成果と評価

当日は一般地域住民に加え、近年当地へ移住してきた方、当地と都市間交流を行っているNPO関係者、介護福祉士資格取得を目指し当地へ移住し専門学校へ通う学生、たまたま当地の知人を訪ねて来町していた方の参加があった。その結果、当事業を通して特に下記の成果が挙げられた。

・[住民交流][世代間交流]

ものづくりを通し参加者同士のコミュニケーションを触発し、地域住民同士の新たな出会いの場となった。また、それらが20代～70代と幅ひろい世代の参加者の間で行われたことは、ワークショップ型の成果といえる。

・[地域資源の理解]

「地域での暮らし方や文化がとても楽しく伝わった」とのアンケート記述に見られるように、移住者や学生の伝統文化という地域資源の理解をすすめた。

・[地域間交流][まちづくりへの意識喚起]

「山口での実際の活動の話がよかった」というアンケートでの記述、講演で触れられた山口の“ランプの宿”を拠点とした活動に興味を持ち、行ってみたいとなったとの旨の会場での声を聞くことが出来た。まちづくりや生きがいつくりへの意識喚起、地域間交流のきっかけづくり

の成果があった。

・[活動モチベーションの向上]

しめ縄づくりを指導して下さった方から、「秋からの正月飾りづくりも手伝いに来てね」と参加者への呼びかけや、それに呼応する参加者の声があった。本事業での交流が、地域資源を活かした活動モチベーションの向上に成果があったと言えよう。

また、当地へ移住して六日市学園で学ぶ学生には、介護福祉士として当地で暮らしてゆきたいという方が一定数いらっしゃる。介護福祉士という職性上、地域特性の理解と地域住民との交流は、当地で仕事をしてゆく上で欠かせない要素の一つであろう。また、その様な介護福祉人材が地域に根ざすことは、地域の新たな財産（＝資源）となってゆくであろう。上記のような成果が見られた本事業は、地域の新たな資源をつくるきっかけの場となりうる可能性を秘めていると評価できよう。

■事業の成果から得た知見

「団塊世代以降の社会貢献に向けた調査ならびにプログラム策定事業」の試行事業としては、[地域文化] 或いは[地域資源]、[世代間交流]、[まちづくり]がキーワードとして挙げられよう。概して団塊世代以降への継承がスムーズに行われていない[地域文化]を、[世代間交流]を通して地域に残してゆく。また、その[地域文化]を[まちづくり]へとつなげることで、地域社会貢献につながり、各世代の生きがい創出にもなりえる。本事業から以上の知見を得たことも大きな成果の一つであろう。

5. 今後の課題と展望

参加者アンケートから、「今後、講演できいてみたいテーマやワークショップでやってみたいテーマ」として、漬物づくりや味噌づくり、地域に伝わる昔話や里山の木の利用についてなどが挙げられた。この為には地域資源のヒト・モノ・コトにわたるきめ細やかな調査を通じた、継続的な地域住民との交流が課題として挙げられる。

また、本事業での成果を継続させる事も課題の一つであるが、その為には蔵木メ縄会の様に地域資源を活かした活動を如何にコミュニティ・ビジネスにつなげてゆくかが問われているであろう。前述の各成果に[コミュニティ・ビジネス]という要素が加わり、それぞれが縦糸、横糸となることで、前述の各成果は継続的展開となりえると考えられる。

加えて、上記の様な活動を支援する有償・無償のボランティアの組織化が、その活動継続の要素として大きいと考える。このことの実現は、各活動が参加者の生きがいとして位置づけられることがその条件の一つであると考えられる。

第1回大分・安心院スローフードフェア

—— NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会

1. 事業の目的

これまで当会では、農山村地域の活性化と生きがい対策とし、農村民泊発祥の地として全国に先駆け、農村民泊を行ってきた。その中で農山村地域の家庭料理・地産地消料理等の「食」の体験は、グリーンツーリズムの大きな魅力としてその価値が高まってきている。この度、農泊受入家庭のみならず、食育関係者や加工販売業者などを含めた地域全体として、地域の文化や伝統食に対する消費者の理解を深めるとともに、農村民泊の食について魅力の向上と情報発信を図り、宇佐地域におけるグリーンツーリズムの更なる振興と実践者の生きがいづくりを目指す。

2. 事業の実施体制及びその他の関連団体等との連携

主催：NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会

スローフードフェア実行委員会

共催：北部地域食育推進連絡協議会

後援：大分県・宇佐市・(財)健康・生きがい開発財団

協賛：宇佐市観光協会安心院支部、大分県農業協同組合安心院地域本部、大分銀行(株)、三和酒類(株)安心院葡萄酒工房、家族旅行村安心院、(株)福友産業、(株)延岡総合市場、セルフおの、津房館、ヤマサ旅館、亀の井ホテル、朝霧の庄、ムジカ、ハトヤ、村上医院、小の岩の庄、賀来石油、安心院印刷、新開家具、うるしま

3. 実施した事業の概要

1) 実施日：平成22年1月23日(土)

2) 実施場所：第1部：安心院文化会館 / 第2部：安心院中央公民館 集会室

3) 事業の対象

募集範囲：一般市民、旅行業関係者、研究会会員、グリーンツーリズム実践者、
地元商業者など

第1部：約200名 / 第2部：約250名

4) 事業の内容

第1部 / 一、講演会(安心院文化会館)

14:00 開場・受付

14:30 開会

- 1、 開会のことば
- 2、 主催者挨拶
- 3、 来賓祝辞・招待者紹介

14:50 4、 講演

- ① 講師紹介
- ② 講演「町の元気は食にあり」講師：島村菜津氏
- ③ お礼のことば 終了

二、グリーンツーリズム俳句表彰式

16:00 開会

- 1、 選者紹介
- 2、 表彰者発表
- 3、 講評
- 4、 終了のことば

第2部 / 宇佐地域料理や伝統料理の展示・試食会（安心院中央公民館）

16:30 受付

16:40 開場

17:00 開会

- 1、 開会のことば
- 2、 主催者挨拶
- 3、 来賓祝辞・招待者紹介
- 4、 祝電
- 5、 出品料理の紹介（113品目以上）

17:20 6、 乾杯

17:25 7、 試食会開宴、琴・尺八演奏

8、 藁笑 我的主張（約10名）

18:50 9、 終了 お礼のことば、ふるさと合唱

19:00 閉会



4. 事後評価

- ・講演会においてスローフード先駆者の島村菜津氏より近年の欧米諸国のファーストフードと、スローフードの「食」の現状が報告された。これにより地域住民の「食文化」を守る姿勢は、地域を守り発展の原動力となることが伝えられた。高齢者の多い山間地域において、スローフードによる彼らの「健康」と「生きがい・やりがい」づくりは地域活性化への寄与が大きいことを再確認した。また実践者にとっても新しい見聞が増え、スローフードに対する意識の向上や、自分たちがこのフェアを開催することへの意義を再確認できたと思われる。
- ・平成17年3月、平成の大合併により一市二町（宇佐市・安心院町・院内町）の三地域が宇佐市となった。その中で農村民泊実践者の女性たちが「第1回大分・安心院スローフードフェア」を成功させるために旧の地域を超えて再三に渡り協議を重ね、それぞれの地域に根付いた食文化をより広く伝えるために創造と工夫を凝らし努力した。また、その成果が大きかったこと、各地区の団結力が深まったこと、三地域が一体となり達成感が共有できたことは今後の事業体制においても大きな実践力となることが検証できた。
- ・これまでもグリーンツーリズムの実践により交流事業への意識が高かった団塊世代のお母さんたちだが、今回のフェアの実施により、自分たちの料理がより多くの人目に触れ、喜んでもらったことで自信につながり、活動へのモチベーションも上がったと思われる。
また、これまで互いにじっくりと見る機会がなかった、他所の家の料理を知る機会となり、またお母さん同士で評価し合うことで各自の創作意欲やおもてなしの心構えに刺激が与えられたと思われる。満足度の高さが伺える意見や来年に向けての改善の声など、今後の継続に対しても積極的な意向が見られた。
- ・メインとなって料理を準備するお母さんたちだけでなく、そのサポートや大量の竹食器作りなど、特に力作業の面において、お父さんたちの力が発揮されていた。フェアの会場内でも参加者に「食器をさげましょうか」と声をかけるなどの面が評価されていた。
- ・地域の飲食店からも「良いことをしている」という評価があり、今後の連携にも期待ができる。当会だけでなく、今後、地域を巻き込んでの「地域活性化」につながっていくと考えられる。

5. 今後の課題と展望

- ・農村民泊とスローフードフェアの開催の一本化体制により、向こう10年間の地域資源の発掘を見出し、事業拡大を図るためには、人材（後継者）と資金の確保が必須である。また、経費や収入面を考え、実践者に利益が配分できるようになるためのイベント計画の作成が重要であり、料金設定・参加者定員などの再検討が必要である。
- ・日本の農村民泊発祥の地として国内はもとより海外からも民泊希望者を多く受け入れてきたり、学生の修学旅行や体験学習の受入体制を整えてきた。今回のフェアを開催し、安心院の特色として「安心・安全の食の町」「スローフード・スローライフの町」としての地域性を出すことにより、より一層の農泊ファンを拡大でき、農村・観光源泉の発掘につながり、期待ができると考えられる。
- ・併せて農泊実践家庭の特色をアピールし、農泊の顧客確保につなげられる情報発信を行うことが求められる。
- ・第1回ということで全てが手探りであったため、労力の配分に偏りがみられた。特にリーダーの負担が大きい。実行委員会の組織としての構成と人員確保を再検討すべきであった。今後は各現場や仕事に責任者を配置して、労力を分散させることが必要。
- ・お父さんお母さんたちの意識の足並みを揃えることが必要。少なからず、料理は出すけれども運営自体に関してはそこまで意識を持っていない人もおり、今後の継続の上で意識の共有が必要だと考えられる。

5-3 試行事業報告会

(1) 試行事業報告会の概要

1) 実施日時：平成22年2月6日（土）15：10～17：00

2) 実施場所：滋賀県大津港 ビアンカ

3) 対象者：団塊世代以降の年代を中心とした健康生きがいづくりアドバイザー

参加者 118名

4) 報告会座長：瀬沼 克彰（団塊世代以降の社会貢献に向けた調査ならびにプログラム策定事業調査研究委員会委員長）



5) 報告の内容：次の4団体から試行事業の実施内容について報告があった。

①報告1 月寒わが家の手わざ市

実施団体：つきさむくらしネットワークの会

報告者：澁谷 妙子

②報告2 社会貢献型カルチャーツアーの開発

実施団体：NPO 法人 静岡県生きがいづくり協会

報告者：佐藤 清

③報告3 生きがい一座による生きがい支援事業

実施団体：滋賀県健康生きがいづくり協議会

報告者：山口 寿津子

- ④ 報告4 かつらぎ町花園こむぎの郷「深秋の紅葉まつり」
実施団体：和歌山県健康生きがづくりアドバイザー協議会
報告者：市野 弘

